『かさこじぞう』（岩崎京子）を読む
― 作品世界の一貫性をとらえる〈読み〉―

山　下　　直

0. はじめに

『かさこじぞう』の教材研究について、最近論じられたものの一つに鶴田清司（2001）がある。鶴田氏は、鶴田清司（1991）などにおいて、教材研究に〈解釈〉と〈分析〉という観点の導入を提唱し、文学の学習指導のあり方を根本から考え直す必要性について論じているが、鶴田清司（2001）でもその主張に基づいて『かさこじぞう』の指導の問題点を次のように指摘している。

> 『かさこじぞう』は精読に堪える作品だが、それでも六～七時間の配当時間で十分である。この教材で教えるべき〈教科内容〉は、三であげた〈作品分析法〉とりわけ「反復表現に目をつけて人物像を明らかにする」が中心である。「じいさまが帰ってきたとき、ばあさまはどう思ったでしょう」というように「人物の気持ち」をあれこれ考えさせる必要はない。分かり切っているからである。また、「作型」という点から見ても、民話は「語り」が中心で、人物の細かな心理描写は少ないので、先のような「気持ち」発問は控えるべきである。この原則を無視すると、決め手のない問いと思いつきの答えというアナーキーな状態になる。
>
> 人物像にしても、昔話に出てくる人物は単純で類型的な性格であることが多い。善人か悪人か、やさしいか意地悪か、金持ちか貧乏かというパターンである。本作品では、じいさまもばあさまもやさしい人物である。授業では、「じいさまとばあさまのやさしさが分かるところはどこか」という中心発問によって、それを押さえていけばよい。　　（pp35-36：下線は山下による。）

『かさこじぞう』の学習指導・教材研究の現状の問題点が的確に指摘されていると言えよう。「決め手のない問いと思いつきの答えというアナーキーな状態」に陥らないように、「気持ち」発問を控えるべきという主張は重要である。ただ、その中で『かさこじぞう』の人物の気持ちを「分かりきっている」と言い切ってしまっている部分については、もう一度よく考えてみる必要があるのではなかろうか。

確かに、先行研究の教材分析、実践例などを見る限り、鶴田（2001）に述べるように、

人物の気持ちは「分かり切っている」ということになるかもしれない。だが、このような判断に至ってしまうのは、『かさこじぞう』の教材研究自体に、まだ大きな問題が見過ごされたままになっているためと考えられる。

その問題とは、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いの行方である。作品の冒頭部分から、じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせ「安心」して家に帰る場面までの間に、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いがどう変化したのかを考えることの重要性については、先行の教材研究や実践例においてもほとんど触れられていないと言ってよい。

だが、本稿ではこの点について考えることが、作品世界の一貫性やじいさまとばあさまの人物像をとらえるための重要なポイントになると考えている。このような立場から、本稿では、『かさこじぞう』の教材研究において、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いの行方を考えることがいかに重要か、その意義について論じることをねらいとする。

1. 〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いの行方の重要性

① じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村のはずれの野っ原まで来ました。

①は、じいさまが町に「かさこ」を売りに行ったものの、結局一つも売れずにあきらめて村へ帰る時の場面である。この時のじいさまの気持ちを、「もちこ」を買えなかった残念な思いや、ばあさまをがっかりさせてしまって申し訳ない思いなどととらえることに大きな異論はなかろう。

また、次に示す②は、①の場面に続いて、じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせる場面である。

② ところが、じぞうさまの数は六人、かさこは五つ。どうしても足りません。
「おらのでわりいが、こらえてくだされ。」
じいさまは、自分のつぎはぎの手ぬぐいをとると、いちばんしまいのじぞうさまにかぶせました。
「これでええ、これでええ。」
そこで、やっとあん心して、うちに帰りました。

この場面の「やっとあん心して」の「安心」を、六人のじぞうさま全員を寒さから守ることができたことへの安堵、充実感などととらえることにも、大きな異論はないだろう。このように場面ごとに気持ちを押さえてゆくのであれば、鶴田清司（2001）の言うように「分かり切っている」ということになろう。

しかし、①②でとらえたじいさまの気持ちを、作品世界の一貫性という観点から吟味

すると、双方の場面の整合性を説明することがそれほど簡単ではないことに気づく。

①の場面のじいさまの気持ちは、「もちこ」が買えなかったことに対する残念な思いであった。そして、この思いは、直前のじいさまの言葉

③　ああ、もちこももたんで帰れば、ばあさまはがっかりするじゃろうのう。

からも明らかなように、〈ばあさまに申し訳ない〉という思いでもある。一方、②の場面の「安心」は、じぞうさまを寒さから守ることができたことに対する安堵だ。

さて、ここで着眼したいのは、②の場面においては、まだ「もちこ」を手に入れていないということである。つまり、「もちこももたんで帰れば、ばあさまはがっかりするじゃろうのう」という、③のじいさまの思いは何も満たされていないわけである。にもかかわらず、じいさまは「安心」している。しかも、「やっと、あん心して、うちに帰りました。」という描写からは、じいさまの〈ばあさまに申し訳ない〉という気持ちは、すっかりどこかへ行ってしまったような印象さえ受ける。いったい、ばあさまのために〈「もちこ」を手に入れたい〉というじいさまの思いはどこへ行ってしまったのだろうか。

『かさこじぞう』の実践について詳しく分析している深川明子（1987）では、「これでええ、これでええ。」の部分の学習者の〈読み〉として、「かさこ売れなかったこともわすれた。(p157)」「心がすかっとして、売れなかったこともわすれた。(p157)」という発言を紹介し、他の発言も含めて、学習者の〈読み〉を次のように分析している。

> 子どもたちは、じいさまの行動とことばを中心に、おじいさんの人物像をイメージ化しながら、独自の作品世界を創造している。ところで、子どもたちの発言をみていると、自分の創りあげたイメージの世界に入り込んでの発言が多い。自分が形成したイメージの世界に自分の身を置いての発言になっている。つまり、子どもたちはじいさまをイメージ化すると同時に、じいさまの身になって発言している。これは、子どもたちがじいさまの体験を体験していると言ってよい。
>
> (p157：下線は山下による。)

「子どもたちはじいさまをイメージ化すると同時に、じいさまの身になって発言している」という部分から考えても、深川明子（1987）ではじいさまが「かさこ」が売れなかったことを忘れてしまったという〈読み〉を容認していると考えてよいであろう。

ところが、じいさまが「安心」した時、「かさこ」が売れなかった残念な気持ちを忘れていたとすると、「もちこ」を買えず〈ばあさまに申し訳ない〉という気持ちも忘れたことになってしまう。だが、じいさまのやさしさは自明のことであり〈ばあさまに申し訳ない〉という気持ちを忘れてしまうなどということは考えられない。では、上に示した学習者の発言は、誤った〈読み〉に基づいたものということになるのだろうか。だが、もし「忘れていない」ととらえるなら、今度はじいさまが「安心」すること自体があり

得ないことになってしまう。

このように、じぞうさまに「かさこ」をかぶせる場面で、じいさまの〈ばあさまに申し訳ない〉という気持ちがどのように変化しているのか（または変化していないのか）を明らかにしないと、じいさまの「安心」がどのような気持ちなのかを的確に説明することができないのである。

これは、①の場面でとらえた、「かさこ」が売れなかった（「もちこ」を買えなかった）残念な気持ちが、場面の展開とともにどう変化していくのか（または変化していないのか）をきちんと把握しなければ、②の場面の「安心」した気持ちとの整合性が保障されず、作品世界の一貫性をとらえられなくなるということである。じいさまが〈ばあさまに申し訳ない〉という気持ちを忘れてしまうような人物でないことは明らかである。そのやさしいじいさまが、なぜ「もちこ」を買えず、このままだとばあさまががっかりしてしまうはずなのに「安心」して家に帰ったのか。この問題に明快な答えを出さなければ、いくら教材研究を深めても作品世界の一貫性をとらえたことにはならない。

『かさこじぞう』はもとは民話であり、そのような細かい点を気にするよりも、教師の眼前に、じいさまのやさしさに触れて感動している学習者がいる現実を大切にせよという意見もあるかもしれない。しかし、だからといって、教材研究における作品世界の一貫性の把握を犠牲にしてよいということにはならない。

この問題を整理し、一貫性のある〈読み〉に基づいた教材研究を構築するためには、単にじぞうさまを寒さから守ったことだけではなく、「かさこ」が売れず（「もちこ」を買えず）にがっかりした気持ちにも目を向け、じいさまの気持ちにどのような変化があったのか（なかったのか）をていねいにとらえる必要がある。そして、この点にこそ、じいさまの人物像をとらえる重要な手がかりがあるとも言える。次節では、その前段階として、作品の冒頭の場面から読み直すことで、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いを詳しく検討し直すことから始めることにする。

2.「もちこ」を手に入れることの意味

1. では、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いの行方を明らかにしなければ、作品世界の一貫性をとらえることができないことを確認した。ところで、〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いの行方を明らかにするためには、肝心の〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いが、どのようなものなのかを整理する必要がある。そこで、作品の冒頭から、じいさまが「かさこ」を売りに町へ出かけるまでの場面を、もう一度ていねいに見直していくことにする。

ここでまず着眼したいことは、「かさこ」づくりが、ばあさまの提案にじいさまが賛同する形で行われるという点である。

④「じいさまじいさま、かさここさえて、町さ売りに行ったら、もちこ買えんかのう。」

「おうおう、それがええ。そうしよう。」

④の場面で、じいさまはばあさまの提案を手放しで受け入れている。ばあさまがよいことを思いついてくれたと心から喜んでいるようである。その一方で、じいさまは町で「かさこ」が一つも売れなかった時に次のような言葉を発してもいる。

⑤「年こしの日に、かさこなんか買うもんはおらんのじゃろ。……

⑤は、じいさまがばあさまの提案を手放しで喜びながらも、町に行く前から「かさこ」が売れないかも知れないという予測を持っていたことを伺わせる。ばあさまの提案を手放しで受け入れながら、それを否定する予測をしていたことがほのめかされているのはなぜなのか。このことから、どのようなことを読み取るべきなのか。

この点にこそ、検証の糸口があるのではなかろうか。じいさまは、売れぬことを承知で町に行った。それはなぜなのか。

じいさまの「お正月さんがござらっしゃるというに、もちこのよういもできんのう。」という言葉は、ばあさまにすまない、つまり、〈貧乏なのでどうしてやることもできないが、それでもばあさまに何とかお正月らしいことをしてやりたい〉というもどかしい思いを表していると言ってよいだろう。そして、じいさまとばあさまの、互いを大切に思いやる姿から考えると、ばあさまもじいさまがそのようなもどかしさを抱えていることをよく承知していたと考えることができる。

もどかしさを抱えているじいさまの気持ちを軽くするためには、じいさまがばあさまのために何か行動する必要があるのだが、家の中には何もない。そのような状況で、それでもばあさまはじいさまのために何とか考えて、「かさこ」作りを提案してくれたのである。そして、じいさまもそういうばあさまの優しさ、思いやりを理解していよう。だから、今度は自分がばあさまの思いやりに何とか応えたいと思う。

じいさまが町に「かさこ」を売りに行くまでの二人のやりとりをこのようにとらえることで、〈ばあさまの思いやりに何とか応えようと思っている〉じいさまの姿が浮き上がってくる。するとじいさまが〈「もちこ」を手に入れたい〉と思うのは、「もちこ」それ自体に対する物欲的な執着ではなく、ばあさまの思いやりに応えるための手段であると考えることができよう。つまり、ばあさまの思いやりに応えるのに「もちこ」を手に入れること以外の手段があれば、〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いに執着する必要がなくなるということである。

確かに、①の「とんぼりとんぼり」帰る場面までは、「もちこ」を手に入れることが唯一の解決策であり、この時点では〈じいさまは何としても「もちこ」を手に入れて、ばあさまを喜ばせたいと思っている〉という〈読み〉を妨げる要素はない。しかし、この〈読み〉は〈「もちこ」を手に入れたいという思いへの執着＝ばあさまへの思いやりの深さ〉という短絡的な図式に陥りやすく、「もちこ」を手に入れることを、作品全体を通し

ての唯一の解決策ととらえてしまうおそれがある。[1] そうなると、「もちこ」を手に入れない（ばあさまに申し訳ない）ままなのにじいさまが「安心」してしまうという、じいさまのやさしさから考えると到底あり得ない状況を招かざるを得なくなってしまう。

だが、先に述べたように「もちこ」を手に入れることを、ばあさまの思いやりに応える手段の一つとして位置づければ、それ以外の手段でばあさまの思いやりに応え、じいさまが「安心」することも十分あり得ることになる。

本節では、作品の冒頭からじいさまが町へ「かさこ」を売りに行くまでの場面を見直し、「もちこ」を手に入れることがじいさまの目的ではなく、ばあさまの思いやりに応えるための手段の一つにすぎないととらえられることを指摘した。その結果、じいさまが「もちこ」を手に入れないままでも「安心」するという事態が起こり得ることが確認された。

このことは、町に出かける前の次のようなじいさまの言葉からも伺うことができる。

⑥「帰りには、もちこ買ってくるで。にんじん、ごんぼも、しょってくるでのう。」

甲斐睦郎（1988）では、この部分について次のように述べている。

> ここのじいさまの言葉は「ことほぎ」に近い。わざとめでたいことを口に出して前途を祝う言葉である。
>
> 客観的に判断して、一体、この五つのすげがさにどれだけの金銭的な価値があるのか。ほとんどないのではないか。そのことは、じいさまもばあさまもよく分かっている。しかし、どうしてもこのかさこが欲しい、よくできているではないかと気に入ってくれる人が出るかもしれない。いい出来ばえだと感心して大金を投じてくれる人がいるかもしれない。ふたりはそういういろいろな希望に胸をふくらませているのである。(p252)

ばあさまもじいさまも、もし「かさこ」が売れて「もちこ」が手に入るのなら、これほど嬉しいことはない。しかし、そうならないことは二人とも始めから分かっていたのである。二人にとって重要なことは、互いを思いやる心ではなかったか。ばあさまもじいさまも互いをよく理解し、相手のために何かできることをしたいと思うのである。そういう純粋さに読み手も惹かれるのであって、決して「もちこ」を手に入れるという具体的な物欲が行動の原動力になっているのではない。「希望に胸をふくらませている」という指摘も、「かさこ」を何としても売りたいという思いではない。もっと漠然とした淡い期待感である。そして、その淡い期待を支えるのが、じいさまとばあさまの互いを思いやる純粋な気持ちだと言えるだろう。

3. じいさまの「安心」の意味

町に出かけて行ったじいさまの思いを2. のようにとらえると、「かさこ」が売れずに、「もちこ」を手に入れられないまま町を出た①の場面、

① じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村のはずれの野っ原まで来ました。

のがっかりした思いは、〈まだ何もばあさまの思いやりに応えていない〉という無念さ、無力感ということになる。ただ、この時点では「もちこ」を手に入れることが、ばあさまの思いやりに応えるための唯一の手段であるから、「もちこ」が手に入らないことと、ばあさまの思いやりに応えられないことは同義である。

そのため、この時のじいさまの心情を〈「もちこ」が手に入らなかったことによる残念な思い〉ととらえても、それを誤りとすることはできない。しかし、じいさまの思いは「もちこ」というモノ自体に向けられているのではなく、あくまで「ばあさま」に向けられていることを見失わないようにすることが肝要である。

そして、①に続く次の部分

⑦ 風が出てきて、ひどいふぶきになりました。
ふと顔を上げると、道ばたに、じぞうさまが六人立っていました。

から、その状況に変化が起きる。

さて、1. で指摘した問題点は、「かさこ」をかぶせた後のじいさまの「安心」をどうとらえるかであった。まず押さえるべきことは、じいさまの思いは、あくまでもばあさまに向けられ、〈ばあさまの思いやりに応えたい〉という思いで町に出かけたことである。したがって、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という気持ちは、「もちこ」というモノ自体に向けられているのではない。じいさまの気持ちは、あくまでも〈ばあさまの思いやりに応えたい〉であって、「もちこ」を手に入れることはそのための手段にすぎないのである。

このようなじいさまにとって、「もちこ」が手に入らないことが現実となった今、せめて「かさこ」を役立てることが、〈ばあさまの思いやりに応え〉ることになると考えても不思議はなかろう。二人でせっせと編んだ「かさこ」を、じぞうさまを寒さから守るために役立てるなら、自分のために「かさこ」を編むことを提案してくれたばあさまの思いやりにも報いることになる。

じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせたことは、「もちこ」が欲しいという思いを忘れさせたのでもなく、ましてやばあさまへの思いやりを忘れさせたのでもない。ばあさまの思いやりに応えるための手段が、「もちこ」を手に入れることからじぞうさまに「かさこ」をかぶせることに変わったのである。しかも、じいさまの中では、このような

変換が実に自然に行われている。じいさまの思いが、どんな時にもばあさまに向けられているからこそ、このような自然な変換が可能になる。したがって、この自然な変化にこそ、じいさまが常にばあさまのことを思っているという、人物像の一貫性が保障されていると言っても過言ではない。

じいさまの何とかして「もちこ」を手に入れたいという思いを、ばあさまへの思いやりに直結させる〈読み〉は、〈「もちこ」を手に入れたいという思いへの執着＝ばあさまへの思いやりの深さ〉という単純な図式でとらえることができ、わかりやすいかもしれない。（しかも、「とんぼりとんぼり町を出て……」までの部分では特に齟齬を生じない。）しかしながら、この単純な図式に頼ってしまうと、じぞうさまに「かさこ」をかぶせる場面で、じいさまが「安心」することとの整合性を説明できなくなってしまう。

だが、2. で示したように、じいさまが「ばあさまの思いやりに何とか応えたい」という思いで町に出かけたととらえることで、〈「もちこ」を手に入れたいという思いへの執着＝ばあさまへの思いやりの深さ〉という図式から脱することができ、じぞうさまに「かさこ」をかぶせる場面で「安心」することの整合性についてもうまく説明できるのである。

このように考えると、じぞうさまに「かさこ」「手ぬぐい」をかぶせる場面も、冒頭の場面から引き続いて、じいさまとばあさまの互いの思いやりをその底流にとらえることができ、二人の深い絆、強い信頼感という観点で、作品世界の一貫性をとらえられることがわかる。[2)]

4. 餅つきの真似をする場面の位置づけ

ここまで、作品世界の一貫性を精確にとらえるために、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いがどのように変化して「安心」に至ったのかという問題について考えてきた。まず、じいさまにとって一番大切なことは、ばあさまの思いやりに応えることであり、「もちこ」を手に入れることはそのための手段の一つであると考えられることを指摘した。そう考えることで、じぞうさまに「かさこ」をかぶせるという行為が、「もちこ」を手に入れることに代わって、ばあさまの思いやりに応える行為に成り得、じいさまが「やっとあん心して、うちに帰」ることが話の展開の自然な流れの中に位置づけられる。こうして、作品世界の一貫性がとらえられることを明らかにした。

それは、『かさこじぞう』の基底にじいさまとばあさまの互いを思いやる気持ちをとらえることで、作品世界の一貫性が裏付けられるということでもあった。「かさこ」を作る場面、それを町に売りに行く場面、結局売れずに村へ帰る場面、そして、じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせる場面、いずれも二人の互いの思いやりを基底にとらえることで、作品世界の一貫性が保たれるのである。そして、そのような二人の互いを思いやる気持ちは、次の餅つきの真似をする場面にも如実に表れている。というより、むしろ、二人の思いやりは、この場面に収斂していくことで作品世界の一貫性をより明確に示しているのである。

⑧「やれやれ、とうとうもちこなしの年こしだ。そんならひとつもちつきのまねごとでもしようかのう。」
じいさまは、
米のもちこ
ひとうすばったら
と、いろりのふちをたたきました。すると、ばあさまも、ほほとわらって、
あわのもちこ
ひとうすばったら
と、あいどりのまねをしました。
それから、二人は、つけなかみかみ、おゆをのんで休みました。

この場面について、岩崎京子氏は自身の創作として挿入したと述べている。[3] 作者自身が創作したという点から考えてもこの場面の重要さが首肯されるところであろう。

この場面には、物質的には何一つ満たされていなくても不満をもらすこともなく、前向きに生きているじいさまとばあさまの無欲さ、誠実さがみごとに描かれている。じいさまとばあさまの置かれた状況において餅つきの真似をすることなどは、考えようによっては正月なのに食べ物さえろくにないという状況がより強調され、ただ惨めになるだけの行為であるとも言える。にもかかわらず、この場面からそのような雰囲気が感じられないのは、ここまでの作品の展開が、じいさまとばあさまの互いの思いやりに支えられているからにほかならない。だから、読み手はごく自然な流れの中にこの場面をとらえる。二人の思いやり、絆の深さがこの場面に収斂するよう作品の展開が仕組まれているのである。

「それから、二人は……」という最後の一文も、二人の貧しさを強調しているのではなく、二人が淡々とした日常に戻っていることを示しているととらえるべきだろう。大みそかに「もちこ」がなくても、二人はいつも通りの生活をいつも通りにただ淡々と過ごしていくことができるのだ。この場面には、「もちこ」への未練などみじんもない。読み手は、この一文を読むことで、じいさまとばあさまの互いの信頼の強さ、絆の深さを確信するのである。

5. じぞうさまは何に報いたのか

『かさこじぞう』は、最後は次のようになっている。

⑨ じいさまとばあさまが、おきていって雨戸をくると、かさこをかぶったじぞうさまと、手ぬぐいをかぶったじぞうさまが、
じょいやさ、じょいやさ

と、からぞりを引いて帰っていくところでした。
のきの下には、米のもち、あわのもちのたわらがおいてありました。
そのほかにも、みそだる、にんじん、ごんぼやだいこんのかます、おかざりのまつなどがありました。
じいさまとばあさまは、よいお正月をむかえることができましたと。

六人のじぞうさまが、「米のもち、あわのもちのたわら、みそだる、にんじん、ごんぼやだいこんのかます、おかざりのまつなど」を運んでくる。こうして、じいさまとばあさまは、「もちこ」を手に入れることになり、作品冒頭部ともうまく対応し作品に完結性が与えられる。そのような対応から考えて、『かさこじぞう』を、〈じいさまがじぞうさまによいことをした報いとして、「もちこ」が欲しいという二人の望みがかなえられた〉話としてとらえる立場もあろう。

しかしながら、本稿ではこのような立場をとることはできない。4. にも述べたように、本稿では、作品の基底にじいさまとばあさまの互いを思いやる気持ちをとらえることで作品世界の一貫性をとらえ、それは⑧の餅つきの真似をする場面に収斂されていると考えるからである。したがって、本稿では⑨の場面はいわば、エピローグのようなものとしてとらえることになる。このようなとらえ方は、すでに森田政利（1983）や深川明子（1987）などでも論じられている。

> じぞうさまの願いを現実化し、吹雪から身を守らせることができて、主人公、読み手も納得するが、主人公の人並みに正月を迎えたいという願いは、この場面で実現されておらず、読み手を納得させない必然性があり、この必然により（5）場面（じぞうさまが正月に必要な品物をどっさり持ってくる場面：山下注）でのかさこじぞうが、主人公に人並みの正月を迎えさせた行為は、合理的となり、読み手の心理と合致して、納得性のある作品となっている。
> （中略）
> では、この「かさこじぞう」を「恩返し」であるという根拠はどこにあるのだろうか。かさこじぞうが、主人公から受けた恩に報いたというのなら、（4）場面（じいさまとばあさまが餅つきのまねごとをしてから、眠りにつく場面：山下注）までの主人公の必然性がない。それは、（2）場面（町でかさこを売るが、だれにも買ってもらえなかった場面：山下注）の正月がいもんをする人々が、たまたま買ったかさこを、かぶせてあげたという語りでも、おかしくないからである。　（森田政利（1983）p204）

> ここ（本稿における⑧の場面：山下注）は、この日の二人の最後の言動を描いた場面である。まさに、二人の言動を語る物語の終結部なのである。この場面を「事件の終結」ととらえたのはそのためであり、この「かさこじぞう」は、二人の言動を語った物語で、その言動はすべてこの場面で語り尽くされている。（中略）

最後の「じぞうさまがお礼に来る」話は、いったい何のためにあるのであろうか。それは、あの二人が餅のない正月を迎えるのは、余りにも可哀相と思う読者の気持ちに応えるためである。そして、こんな善良な人たちがけっして不幸であってはいけないという語り手の思いを伝えるためである。(中略)

ここから、よいことをしたからよいことがおこったという主題を引き出すべきではない。この「かさこじぞう」は、よいことをしたらその行為が報われるという因果応報の作品でもなく、勧善懲悪を説く作品でもない。 (深川明子 (1987) p140)

双方の論に共通していることは、作品の主題を「恩返し」ととらえない点と、最後の場面の位置づけを、読み手を納得させるためのエピローグとしてとらえている点である。本稿でも基本的にはこの立場に従う。しかしながら、エピローグと位置づける理由を、読み手を納得させるためととらえるだけでは、作品世界の一貫性という観点からは物足りないと言わざるを得ない。また、いくら「恩返し」や「因果応報」の話ではないといっても、じぞうさまが〈報い〉として正月に必要な品々を運んできてくれたことを否定することはできないだろう。

では、どのようにとらえればよいのか。それは、この〈報い〉が、じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせるといったような、作品中に描かれている具体的な行為に対するものではないととらえればよい。確かに、〈報い〉の直接的なきっかけは、じぞうさまに「かさこ」をかぶせたことかもしれないが、じぞうさまはこの行為だけに対して報いたのではない。作品の基底に描かれている、じいさまとばあさまの強い信頼感、深い絆によって結ばれている日常の生き方に対して報いたのである。冒頭から一貫して二人の互いを思いやる心、信頼する心、互いの深い絆が描かれている。これらは、極貧の状況にもかかわらず、悲壮感もなく愚痴をこぼすこともなく淡々と素直に生きている二人の日常を、読み手にも容易に想起させる。そして、この想起される二人の日常があるからこそ、じぞうさまの〈報い〉がより必然性のあるものとして読み手に受け入れられるのである。

このようにとらえることで、じいさまとばあさまの互いの思いやりの深さに支えられている作品世界の一貫性の中に⑨の場面を位置づけることができる。じぞうさまの〈報い〉は、作品中の出来事に対して行われるといった単純なものではない。作品世界に一貫して描かれているじいさまとばあさまの互いの思いやりの深さから想起される、じいさまとばあさまの日常の生き方に対するものなのである。そして、そのような〈読み〉が成立するところに『かさこじぞう』の作品としての深さをとらえることができるように思われる。

6. まとめ

本稿は、『かさこじぞう』の教材研究において、作品の一貫性をとらえる上で重要な問題点が見過ごされていることを指摘し、その問題を解決して作品の一貫性を精確にとら

えることを試みた。

じいさまは「もちこ」を買うために、「かさこ」を作って町に売りに行くが、一つも売れずがっかりして帰途につく。その途中で、吹雪の中で雪にうもれたじぞうさまに出会い、「かさこ」と自分の「手ぬぐい」をかぶせて安心して家に戻る。

従来の教材研究では、「がっかりした」気持ちが「安心」に変化する過程について十分な考察がなされてきたとは言い難い。ところが、「もちこ」を手に入れたわけでもないのに、なぜ、じぞうさまに「かさこ」をかぶせると「安心」するのかという疑問に答えることはそれほど容易なことではない。なぜなら、「もちこ」を買えないということは、ばあさまをがっかりさせることでもあり、じいさまがそのことを忘れて「安心」するということは、じいさまのやさしさから考えてまずあり得ない〈読み〉になるからである。

そこで本稿では、じいさまの〈「もちこ」を手に入れたい〉という思いを検証し直すことから始め、じいさまが町に「かさこ」を売りに行ったのは、ばあさまの思いやりに応えるためであり、「もちこ」を買うことはそのための手段の一つにすぎないととらえられることを指摘した。このとらえ方に基づき、じぞうさまに「かさこ」をかぶせるという行為は、ばあさまの思いやりに応えるための手段となり得ると言え、じいさまの「安心」も話の展開の自然な流れの中に位置づけることができ、作品世界の一貫性をとらえることができる。

「もちこ」を手に入れたいという思いを、じぞうさまに「かさこ」をかぶせる行為に自然に変化させる姿からは、ばあさまのことを第一に考えるじいさまの人物像を読み取ることもできる。したがって、「もちこ」が手に入らず（「かさこ」が売れず）、がっかりして町に帰る場面から、じぞうさまに「かさこ」をかぶせ「安心」して家に帰るまでのじいさまの気持ちの変化をとらえることは、じいさまの人物像の把握は言うまでもなく、じいさまとばあさまの互いを思いやる心が、作品世界の一貫性を支えていることをとらえるためにも重要であると言える。

深川明子（1987）では、「（じいさまが）かさこ売れなかったことわすれた」という学習者の発言が容認されていた。この発言が〈じぞうさまによいことをした充実感が、ばあさまへの申し訳ない気持ちを忘れさせた〉という意味ならば容認することはできない。しかし、〈じぞうさまに「かさこ」をかぶせることで、ばあさまの思いやりに応えることができたので、がっかりするという気持ち自体がなくなった〉という意味ならば、容認されるべきであろう。

『かさこじぞう』は小学校二年生の教材であり、学習者たちは自分の思いを十分な言葉で表現することができない。「かさこ売れなかったことわすれた」という発言の真意を教師が的確にとらえるためには、本稿で述べた点をしっかり押さえた教材研究が不可欠である。小学二年生である学習者の〈読み〉を吟味しながら授業を組み立てていく教師は、「かさこ」をかぶせて「安心」する場面までのじいさまの心情変化をきちんと整理し、作品世界の一貫性を精確に把握しておかなければならないのである。

〈「もちこ」を手に入れたいという思いへの執着＝ばあさまへの思いやりの深さ〉とい

う単純な図式から抜け出せなかったり、じいさまの「安心」に対する緻密な把握がなかったりしたのでは、作品の一面を平板に味わうことしかできない。『かさこじぞう』に描かれている、じいさまとばあさまが互いを信頼し思いやる心の深さは、それほど単純なものではない。そして、このことに気づいた時に、読み手は本当の感動を得ることができるのではなかろうか。学習者の一人でも多くをそのような感動に導くためにも、教師の綿密な教材研究が欠かせないように思う。

注

1）じいさまの「もちこ」への強い執着をとらえる〈読み〉を主張している論としては、小美濃威（1989）や成田徹夫（1991）がある。特に、小美濃威（1989）では、じいさまが「安心」して家に帰る段になっても、「もちこ」への執着を忘れていないとする。しかし、いずれの論においても「安心」との齟齬についての明確な説明はない。

2）じいさまがじぞうさまに「かさこ」をかぶせたのは、じいさまのじぞうさまに対する思いやりによるものであることは当然である。ここでは、じいさまの「安心」がどのような気持ちかということに的を絞って論じている。

3）浜本純逸（1988）では、岩崎京子（1977）「『かさこじぞう』をめぐって」（『国語の授業』No. 21 一光社 p20）からの引用としてこのことを指摘するとともに、福山孝美（1977）「『笠地蔵』の教材化」（『国語国文学会誌』No. 21 福岡教育大学国語国文学 p18）に、岩崎の再創造以前にも「から臼つき」の場面を持った原話の存在が確かめられている旨が指摘されている。

引用文献・参考文献

安藤　操（1980）『国語教科書批判』三一書房　pp. 17-47

梅崎義隆・日浦成夫ほか（1996）『『かさこじぞう』『白いぼうし』『おむすびころりん』の読み方指導』明治図書

小美濃威（1989）『「かさこじぞう」の授業』桐書房

甲斐睦郎（1988）「「かさこ地ぞう」の表現」実践国語研究（別冊）No. 81　明治図書　pp. 243-264

渋谷　孝・市毛勝雄（1997）『実践言語技術教育シリーズ小学校編第2巻かさこじぞう』明治図書

鶴田清司（1991）『国語教材研究の革新』明治図書

鶴田清司（2001）「「まずしさ」と「やさしさ」の世界ー『かさこじぞう』（岩崎京子）の〈解釈〉と〈分析〉」『文学の力×教材の力　小学校編2年』田中実・須貝千里編　教育出版 pp. 22-37

成田徹夫（1991）『文芸研・教材ハンドブック 17　岩崎京子＝かさこじぞう』明治図書

浜本純逸（1988）「民話の学習指導覚え書きー「かさこじぞう」を中心にー」実践国語研究（別冊）No. 81　明治図書　pp. 5-9

深川明子（1987）『イメージを育てる読み』明治図書　1987年　pp. 127-177

松本　旭・向川幹雄・萩原昌好（1982）『文学教育の理論と実践』桜楓社　1983年　pp. 87-105

望月善次（1988）「「笠地蔵」の基本的構成要素ー「かさこじぞう」実践・研究に関する基礎的一考察ー」国語科教育　第35集　全国大学国語教育学会　pp. 52-59

森田政利（1983）「「かさこ　じぞう」の授業」『文学教育の実践1低学年篇』佐古田好一ほか青木書店　pp. 191-233

＊『かさこじぞう』の本文の引用は、学校図書『小学校こくご　二年下』（平成14年発行）によった。

（やました　なおし　文部科学省教科書調査官）